



株式会社伊藤組落合工場（昭和61年）

合集落とともに歴史の歩みを続けている。  
現在の営業形態は、造材、造林、製造（針葉樹一般製材）の三部  
門で、年間生産能力は、次のとおりである（落合木工場資料）。

年次	針葉樹製材(㎡)	年次	素材生産量(㎡)
昭和五五年	一一、一四四	昭和五五年	一九、八三六
五六年	一一、五三五	五六年	二〇、二九五
五七年	一二、四九八	五七年	二六、三七三
五八年	一二、二一四	五八年	二七、一六八
五九年	一三、三二一	五九年	二七、三九二
六〇年	一三、〇二八	六〇年	二五、六六七

従業員の推移は、次のとおり。

五年 男 五 男 五 男 五 男  
 男 二八 元 三〇 元 三〇 元 三〇  
 女 二〇 九 九 九 九 〇  
 計 三〇 元 元 元 元 元  
 販路の現況は、主として札幌、小樽、函館と、その周辺の問屋、工務店に移出している。昭和六〇年現在の敷地、建物は、次のとおりである。  
 敷地 当社分 二九、八一八平方メートル

四〇年（一九〇七）北五条西八丁目に家屋を購入、翌年移転す。

必要な製材工場として、明治、大正、昭和の三代にわたって、落

国鉄 一四九五平方メートル  
 旭川土建 三二、二九六平方メートル  
 建物 工場 一、三三七・二九平方メートル  
 住宅 二二七六・〇五平方メートル

機械及び装置については、多岐にわたっているが、数種を挙げれば、次のとおりである。

帯鋸機 集塵装置 帯鋸切断機 帯鋸歯抜機 帯鋸接合機 木皮粒砕機 横切機 自動研磨機 テッパ機 自動送り機 材寄せ機 電気歩出機 帯鋸目立機 自動目立機 車両は四両（運搬車） ショベルローダ他  
 歴代工場長

氏名	就任年月日	氏名	就任年月日
安済 清八	明治四四・七・八	中島 光男	昭和三四・五・一
柄沢 角治	大正一五・三・一〇	山谷 浅治	〃 三九・五・一
斉藤 直治	昭和一六・五・六	東 武雄	〃 四五・五・一
加藤富士松	〃 一九・一〇・一	佐藤 信	〃 五五・五・一
村田 広吉	〃 二二・五・一	黒川 俊一	〃 六一・三・五

**幾寅木工場** 当木工場は大正七年（一九一八）ごろ創業、宮北清七、山岸甚之助、黒田善八、日下好治らを中心とする合資会社で、蒸気を原動力として操業したが、需要が少なく進展しなかった。しかし、幾寅初期の建設用材などは、総てこの木工場で生産されており、歴史的には大きな意義をもつ工場であった。



機関により運転操業したが、前述の経緯により、三〇年八月、寺西武雄にこの工場は譲渡され、寺西により経営されることになった。

工場も電力を導入し運転され、原木の供給は、金山営林署、東大演習林などから受け、製品の販路は、東京、大阪、札幌、小樽方面であった。

製材界も、昭和三〇年代後半から、大型施設の耐火構造が普及し、製材需要は減少の傾向をみせ、加えて、原木供給にも有限説が出始め、木材価格は高騰し、製材生産にも制限を余儀なくされ、経営の合理化に迫られる結果となり、四〇年一月三十一日、下金山における三五年間の製材の歴史を閉じた。同年一月一日に下金山木工場、石川組木工場、金山木工場の三者により株式会社金山木工場を設立、経営の合理化、統合を果たしたのである。

**石川組木工場** 戦後の人口増加と諸制度の改革によって、住宅はもとより、学校その他の諸施設の建設が進められ、本村の木材業界も活況を呈し、製材需要の急速な成長に対応し、木工場などの創業をみるに至った。

石川組もその一つであり、昭和二二年から金山営林署の下請造材を行う一方、移動製材を手がけたのを契機に、二五年に石川組木工場を創業した。石川一男が創立者であり、工場長として活躍した。

原木の供給は、金山営林署から受け、製材は主として、札幌、赤平、岩見沢、石狩太美、小樽へ出荷した。

しかし、この工場も、前述の経済情勢下にあって統合を余儀なくされ、昭和四〇年一〇月閉鎖となり、金山で製材事業の一翼を担った木工場の姿は消えることとなった。

**金山木工場** この木工場の前身は、昭和二〇年五月一日創立の金山木材工業株式会社で、初代社長は多東清吉であり、二代社長には小泉恒吉が就任、専務取締役は太田末吉であったが、二四年三月三十一日に解散した。

昭和二五年三月二三日、前記の会社施設を買い受け、株式会社金山木工場を創業した。創立者は山岸与平と寺西武雄で、資本金は一〇〇万円であった。

原木は、金山営林署から年間立木約二万石、素材八〇〇〇石の払い下げを受け、製材一万五〇〇〇石の生産を揚げ、製材需要に対応し、順調な操業を続けたが、三一年三月三十一日、火災により工場、吹抜約二二〇坪を焼失した。しかし、同年七月一五日には、工場、吹抜一九〇坪を再建新設し、資本金を三〇〇万円に増資した。代表取締役山岸与平、取締役寺西武雄、館内猛、金尾貫治、監査役愛須為吉が就任した。従業員は約三〇名、造材期には季節労働者を約七〇名雇用、購入資材は地元業者に依存しており、造材費用の約四〇％は地元へ還元された。